

560
2

5 6 7 8 9 270 1 2 3 4 5 6 7 8 9 28

始





人生叢書
第三篇

人生の行路

松山敏著

大正
15年出版
内交

自序

私は今、人生の途半ばに立つて、自分の歩いて来た道を振り返るとき、誠に落莫たる思ひがする。美しい夢の世界、悩み多き青春、人生の秘密、現實の痛苦、慌たどしい生活、そこには寂しい人生の姿もあれば、また見果てぬ夢の歎きもある。

しかし、今にしてそれを思へば、すべては再び返らぬ過去の影だ。懐しくもあれば、限りなき愛着も覚える。同時に私は私と共に行路を共にして来た人々、或は私より先に此の行路を通り抜けた人々、或は次に此の行路を辿るべき人々に對して、私の胸中の一斑を分ちたいと思ふ心から、次の一篇の序詩を以て、この書を世に送る。

大正十五年八月、都塵の中にて。

著

者

序 詩

I

道は遠く、峻しく
當てもなく行先に迷ふ
永遠に繰返される
人生の行路！

II

足取り軽く
心も軽く
いそいそと歩く
薔薇色の朝。

1

III

歩み疲れて

茫然と佇み

深き思ひに沈む

灰色の真晝。

IV

悶え苦しみながら

首垂れつつもなほ

また歩みつづける

青き黄昏。

V

春はゆたかに

日は輝き、野はほゝ笑む

自然は早やも愛の喜びを

人の胸におくる。

VI

薔薇と百合とは

しぬびやかに夏を撥^{はら}び

河邊に森蔭に――

快樂と幸福をあつむる。

VII

秋は葉する虫ばみ

鳥は羽音そよがせて泣きすぎる
人は過ぎし日の思出に
さみしき運命を嘆く。

VIII

林の色は純み果て
荒れた墓場のやうな冬は
不安と苦しみを人の胸に投げ
春待つ心に勇氣を誘ふ。

目次

静に想ふ……………三

✓一生の方向……………五

生きる爲には……………六

生きてゐる間は……………八

生きる喜び……………一〇

心の悩みに打勝つには……………一一

苦痛を苦痛として……………一二

✓自己を生かすこと……………一三

生 甲 斐……………一四

勇敢な態度……………一四

希望と失望……………一五

生活の不安……………一六

人間の仕事……………一七

独立と実行……………一八

独立心と野心……………一九

事業と健康……………二〇

義理人情……………二二

愛……………二三

虚榮心……………二四

魂の深さ……………二六

死の船……………二七

生命の芽生……………三二

幼年期……………三三

少年期……………三五

青春期……………三六

人生の面影……………三九

人間と運命……………四一

◎或る男の生活の縮圖……………四四

夫婦の生活……………四七

わが人生日記より……………五九

信仰と感化……………六九

カインの罪……………七一

ノアと洪水……………七三

基督の生活……………七四

釋迦の歩いた道……………七六

トルストイの教化……………七七

詩人シェリーと人生の夢……………七八

四郷さんの人間味……………七六

理想から現実へ……………八三

理想と現実に生きる悩み……………八五

失職してゐる友へ……………九〇

幼年教育について……………九三

人生とユーマア……………九四

運命に呪はれた人々……………九七

1、病める大學生……………九九

2、戀に狂ふ女……………一〇三

幼き日の憶ひ出……………一〇七

少年の日……………一三三

人生叢書第三篇

人生の行路

松山敏著

静
に
想
ふ

人生の静寂

山田孝太郎

人生の静寂



一生の方向

一生の方向を定めるのに、人は如何なる方法をとるか。それは自分自身に気づかないうちに、自然と一つの穴に落ちてゆくやうな場合が多い。

自分の才能を信じてながら、自分の好きなことに一身を投ずることの出来ない場合もある。さうした時、人間は自分の一生の方向について煩悶する。

また自分の才能に適した仕事を選んでも、その仕事とは思はしくゆかないで、多くの艱難を嘗めるとき、絶望の崖は人をして一生の方向に迷はしめることが多い。しかし、自分が一生の迷路に立つた時、人は始めて眞實に生きてゆく道の方向を見出すのだ。そこには確かに生活の光明が認められるであらう。

5 世の中には幼少の頃から、自分の一生の方向を定めてかゝる人がないでもない。けれどもさうしたことは、何うかすると實現されないうちに變化することが、十中の八九はあると思ふ。それ

6 は多くは、その人の一個の考へから定められたものではなくて、親や兄弟などが、自分の見込みで決定してゆくのだから、果してその方向へ適してゐるか何うかは、實際にぶつゝかつて始めて定められる譯だ。

だが、かうした舊式の慣習は、今後の人間は、大いに打破してゆかねば駄目だと思ふ。そして自分の力を信じ得られるまでは、自分の一生の方向を定めない方がいいと思ふ。果して自分が如何なる方へ伸びる力を持つてゐるか？ これは總ゆる經驗を経た後でなくては、眞實に自分の力を信ずることは出来ないからだ。自分の力さへ見出し得れば、屹度一生の方向といふものは、自ら定つてゆくに違ひない。

生きる爲には

人間は生きる爲めには、どんなことでも敢てするものだ。それもその人その人の考で、各々やること違ふが、或る點までは共通したところがある。

自分が生きる爲に、他人を不幸にするのは、最も忌むべきことだが、世間にはさうしたことを平氣でやつて、少しもそれを心に恥ぢないものが多い。これは生存競争の激しい結果だとも言へば言へるかも知れないが、かうした人間が増加すれば増加するほど、世の中は悪くなつてくる。恰度花壇の中に雜草が繁茂して、美しい花壇を滅茶滅茶にするのと同じだ。

x

生きることが何んなに難しいか、それは個人々々の生き方一つで、他人が迷惑しようと思ふと良心に恥ぢることをしようと平氣である人は、生活の苦痛などを感じることはないが、ただ眞面目に世の中を渡らうとするものは、なかなか容易でない。

現今のやうな社會制度では、無産階級にあるものは勿論、相當なブルジョアの階級にあつても、生活が複雑になつてゐるだけに、その悩みも多いだらうと思ふ。それぞれ階級の違ふ段階に生活の程度が伴つてゆくのだから、それにはそれ相當の生活の悩みも伴つてゆく譯だ。

x

7 だから生きる爲には、自分の力でやれるだけのことをして、他人も自分も幸福になることを望

むのが、最も理想的だ。しかし、世の中はなかなか理想的にばかりはいかない。そこで種々な事情があつても、お互ひに人間同志が、この生きる爲めの理想に進むことを心掛けて行けば、何時かはそれに近いことが實現されると思ふ。

生きてゐる間は

人間は生きてゐる間は、何かしなくてはならない。それは假令平凡な生活をする人でも、華々しい生活をする人でも、その心は同じだ。

兎に角生きてゐる間は、自分に適當な仕事が見たいといふのが、普通の人の希望だ。併しさうした人の中でも、野心のある人だとか、理想に生きる人は、その望みも大きい。だから生きてゐる間は、絶えず次から次へ仕事の手を伸してゆく。

その中でも藝術の仕事などは、なかなか際限がないので、生きてゐる間に完成しないものが多い。それだけ生に執着する力も亦強い。これは確に仕事に未練があるからだと思ふ。

だから藝術家などは、殊に生きてゐる間に、たゞ一つだけでも、立派な自信のある仕事をしなければ嘘だと思ふ。たゞその一つの仕事だけで、その藝術家の生きてゐた間の價值があるのだ。

生甲斐といふものは、さうしたところにあるのだ。

それかと言つて、人間は生きてゐる間、機械のやうに油をさして絶えず動く必要はない。それは生きてゐるといふだけで、何等の意味をなさない。謂はばただ機械的に生きるに過ぎないのだ。

それではなくて人間は、生きてゐる間は、内心の要求に應じて、絶えず意義ある何かをすることだ。そこに生きてゐることの深さを味ふことが出来る。

生きてゐる間は、

人間よ、

何かしようといふ、

希望を捨てるな。

生きてゐる間は、

理想に燃え、

目的に突進し、

自分の思ふことをやつて見ろ。

生きてゐる間は、

決して躊躇せず、

自信のある仕事に、

精進して歩け。

生きる喜び

生きる喜びを感じてゐるものは、また死の喜びをも感じてゐる。

真に生きるといふ喜びの中には、その人の輝かしい生活がなくてはならない。輝かしい生活を終へた魂には充分な満足がある。そこには死に對する恐怖もなければ、生に對する絶望の聲もないのだ。

人間は如何なる仕事に従事してゐても、何時も生活に希望を失つてはいけない。希望に燃えた生活をしてゐる人は、必ず生きる喜びを真に感じてゐる。人は假令現實の苦痛を嘗めても、あらゆる艱難に遭遇しても、希望を失はない限りは、幾度倒れても起き上る力を持つてゐる。そこにも亦、生きる喜びがあるのだ。

心の悩みに打勝つには

人間は心に悩みを持つてゐると、どうも氣分を平靜に持つことは出来ない。神経ばかり苛々して、不安が絶えず心の全部を灰色に包んでしまふ。

その時の人間の心は、すべてに敏感であつて、鋭い針先のやうに神経が尖つてゐるので、何か

にぶつつかる毎に、破裂させずには置かない。いくら冷静に、ちつと平靜な気分にならうとしても、なかなか凡人にはそれが難しい。

人間はさうした気分の時、いつも何うかして、それをちつと耐えることは出来ないものかと思ふ。それは一面に於て、心の持ち方にも依るであらうが、さうした時には心の悩みに打勝つだけの信仰の力に頼ることが、その人をして勇気づけ、且つ心を爽快たらしめる。同時に平靜な気分になるにつれて、生々した活気が全身に溢れてくる。また知らず諷らず希望も湧いてくる。その時こそ人間が眞實に、心の悩みに勝利を示した時だ。

苦痛を苦痛として

「苦痛の人生」とはよく言はれる言葉であるが、果してこの言葉が、どれだけ理解されてゐるだらうか。

人間は一つの苦痛が去れば、更に次の苦痛を期待せねばならない。それは人生に密接の關係が

あつて、切り離さうにも離すことの出来ないものだからである。

苦痛は人生に遠慮なく潜入してくる。それは自身から生じてくる場合と、他から突進してくる場合とある。そこに亦苦痛の程度といふものがある。その場合その苦痛を受け身としてゐる心にも、人々に依つて各々心構へが違ふ譯である。心の弱さとか強さとかいふものは、さうしたところに原因がある。

眞に苦痛を苦痛として、素直に受け入れるには、必ずそれだけの準備が心に必要だ。それは人生の戦場にある勇士の一種の武装だ。苦痛の敵と戦ふためには、武装をしつかりしておかねばならない。だから武装さへ、しつかり出来て居れば、何時でも苦痛を苦痛として、敵對することが出来る。

自己を生かすこと

人の一生は何うにでもなる。なるやうにしかならないと思へばそれまでだが、生き方に依つて

は自己の生命を伸展することも出来る。またどんな事でもやらうと思へば、或る程度までは出来ないこともなからう。併しその間に於て自己を生かすことは、最も容易なことたやすくのやうで却々かえり難しいことだ。

生 甲 斐

自分は近頃つくづくと生甲斐といふことを思ふ。自分の一生を最も価値あるものとしたといふ願ひは、誰の心にも潜んでゐると思ふ。自分もそのうちの一人だ。生甲斐のない一生を空しく送るといふことほど、詰らないことはないと思ふ。

勇敢な態度

如何なる場合でも、人は勇敢でなければ駄目だと思ふ。何事に打突かつても勇敢な態度で進め

ば、必ず多くのことは征服される。間違つてゐてもいい、力は及ばなくともいい。出来得る限りの勇敢さを失ひたくないものだ。勇敢な人は屹度、最後の勝利を獲得する。

希望と失望

希望。僕が人間の心にある間は、人間は勇敢で気分もすがくしいやうだ。

失望。ところが君の姿が淡く消えてゆくと、人間といふ奴は、どうも意氣消沈してしまつて、

僕の影を魂の表面へ現はすのだ。

希望。それぢや矢張り、僕は人間から遠ざかることは出来ないのだね。

失望。さうだ。君の都合もあり、人間の都合もあるだらうが、そこはお互に譲り合つて、永久に君は人間を勵ましてやつて呉れ給へ。

希望。それは僕も望むところだ。だが人間はどうかすると、直に僕の影を魂の表面から追ふやうな態度に出るんだよ。

失望。何時も僕はそれで氣を揉むのだ。僕の姿を隠すやうにして——。
 希望。人間つて奴は、どうして斯う気が變り易いのだらう。
 失望。さあ、どうしてだらうね？

生活の不安

人は生活の不安を感じてゐる時ほど、氣が焦立つて、落着かぬことはない。私は職に離れてゐる人を見るたびにさう思ふ。『あの人は生活の不安を感じて、何も手につかないだらう』と。これは私自ら屢々さうした實感を體驗してゐるから、痛切に感じ且つさう思ふのかも知れないが——。
 兎に角人間は生活に餘裕のある時ほどゆつくりした氣持になることは事實だ。その反對に恐怖と不安とかに脅かされると、生活に巾がなく、従つてゆつくりしたところが無いことも事實だ。併し多くの人は、この地上の生活から、永久にその不安を取除くことは出来ない。人間の生活といふものが破壊される時がなければ。

人間の仕事

人間はどれほどして見たい仕事を心で考へてゐても、なかなか思ふ通りにやつてゆけるものではない。況して自分の一生涯にして見たい仕事を、あれこれと考へて見ると、人間が必ず一度は遭遇せねばならない死といふものの時期が氣づかはれてならない。だから内心の要求の強い人は『死ぬまでには屹度、立派な仕事をして後世に遺したい。』

と口癖のやうにいふのだ。しかし自分では大した仕事のやうに思はないものでも、時を経て其の時代や鑑賞する人の如何に依つては、随分價值のあるものになるものもあるのだ。

だから、人間は自分の實力で出来るだけのことをして、眞理は叶つたことをして置けば、必ず認められる時がくると思ふ。

獨立と實行

獨立心の強いものは、必ず實行力を有するものだ。口ではかり獨立の言葉を並べてゐても、それを實行する力がなかつたら、徒らに時を費すばかりで、遂には時期を失つてしまふことになる。

だから實行の伴ふ人は、獨立を宣言する資格があるが、實行力のない人は寧ろ始めから口にしてない方がいい。そして實行力が全身に溢れてくる時を待つがいい。

しかし世には燃えるやうな獨立心を持つてゐても、種々な事情の爲めに、實行し難い境遇にある人もある。また實行力はあつても、獨立の目的に迷つてゐる人もある。かうした人は獨立を宣言するに當つて、餘程勇氣を出さねばならないが、愈々實行に移れば、割合に容易である。

獨立心と野心

「獨立心の強い人は、必ず大きな野心を持つてゐるね。」

ある時、私の友人が、かう言つたことがある。それは人に依つて多少相異はあるが、大部分は野心に燃えてゐると言つて差支へないだらう。

謂はゞ野心といふものは、人間の心の欲望の一種であつて、その欲望の爲に勇氣づけられる人が多いのだ。だから野心のない人は、大きな仕事は出来ない。それは野心が人間に實行力を與へるからで、野心家ほど實行力が旺盛だ。

この世の中に野心家ばかり多くても困るが、野心家がなくては、すべての仕事は完成しない。殊に事業の如きは、野心家があつて始めて發展するものが多い。そこに獨立心の價値は認められるのだ。

事業と健康

事業を始め、事業を遂行するものにとつて、健康ほどその人直接に關係を及ぼすものはない。心では飽くまで、例令倒れるまでもやり遂げようといふ意氣込みでも、身體が耐へ得られなければ、自然に降服せねばならないやうになる。

健康は實に萬難を越えて、事業を遂行する基礎だ。人間は健康でさへあれば、如何なる苦痛にも、貧困にも、すべてに打勝つことが出来る。そこに健康な人の強味がある譯だ。

しかし、健康を誇りとして、何等の事業をもなし得ない人は、實に一個の人間として、此世に生れた價値はないと思ふ。折角恵まれた生を空しく終ることは、その人にとつての大きな損失だ。それこそ自分の力に及ぶだけの仕事をしようと思へば、何かしら自分を價値づけるだけの事業が出来ないことはないと思ふ。

職人は職人として、農夫は農夫として、商人は商人として、船員は船員として、官吏は官吏とし

て、會社員は會社員として、政治家は政治家として、新聞記者は新聞記者として、藝術家は藝術家として、軍人は軍人として、教育家は教育家として、宗教家は宗教家として、銀行家は銀行家として、工業家は工業家として、學者は學者として、それぞれ自分の仕事の上に、價値ある仕事を見出して、それに健康の許す限りは、全力を注ぐべきである。

そこに事業と健康との大きな効果を見ることも出来、また後世にまで遺し得べき成功が見られるのだ。

義理人情

世間にいふ義理人情とは、どんなものか。それは殆んど習慣性となつてゐるものが大部分で、新しい意義のあるものは、極めて稀である。

多くは世間の習慣を、形通りに踏み行ふてゐるに過ぎないのだ。たと義理に絡まれ、人情にほだされて、謂はど仕方なくやつてゐるものが多いのだ。そこには決して自らの心の動きは、少し

もなく、たと他人がさうするから、さうして置かうとか、これはかう言ふ習慣になつてゐるからかうして置かなければ不可ないだらうとか、殆んど自動的でなく、他動的にすべてが行はれてゐるやうな状態だ。

わが日本では、昔から義理とか人情とか、言ふものは一種の道德となつてゐる。ところが其の道德が、いつの間にか型にはまつた道德になつてしまつて、今日ではその道德そのものが、習慣の中に掩き込まれて、一種の行事のやうな觀をなしてゐる。

これでは義理も人情も、形式に過ぎない。日本獨特の道德も、殆んど形なしだ。どうしても若い人々に依て、創造に富んだ義理人情が生れねば駄目だ。

愛

おゝ神よ、

人類のために、

惱めるものに、

愛を與へ給へ。

愛し得ざるものにも、

愛し得るやう、

愛の乳房を、

探らせ給へ。

愛しても愛しても、

災ひされるもの、

傷け害はれるものゝ爲に、

愛をもて守らせ給へ。

愛する爲に、

他人を傷け、

自己をも傷くる人々のために

愛を惜しまず與へ給へ。

愛なきもの、

愛を求めざるもの、

愛を求め得ぬものゝ爲めに、

愛の尊さを知らしめ給へ。

虚 榮 心

世の中には自分の虚榮心から、自分を亡ほし、また他人に迷惑をかける人が少くない。これま

で私が知つてゐる人だけでも二三人はある。殊にさうした人は、女の人の場合に多いやうだ。

女の人が萬引をするのは、虚榮心の最も激しい部類に屬してゐるに違ひないが、それは一時の氣紛れで發作的に行はれることが多い。殊に虚榮心の強い女は、月經時に注意しないと、ふらふらと欲望に駆られて、罪を犯すことがあるさうだ。これは或る心理学を研究してゐる人から、聞いた説であるが、それも或る點までは信ずることの出来る説だと思ふ。

また私の知つてゐる婦人で、もう幾人も人の母として、立派な家庭の主婦であるながら、時折虚榮心の爲めに、良人や子供たちにまで、耻をかかせて平氣である人がある。かうした人は何ういふ心理状態か一寸分らないが、何でも自分で買ひたいものがあれば借金してでも何でも買つてくると云つた風で、親戚や知己は勿論、一面識の人でも、金を持つてさうな人だと、直ぐに自分の心の欲求を充たす爲に、借金を申込むのだ。そして體よく斷られると、蔭で其人を罵倒すると言つたやうな様子である。さういふ人だから、子供の爲にもなかなか虚榮心が強い。或る時娘が結婚するので、支度一切を調へるのに、高利貸からまで金を借りて、思ふ存分の支度をさせたといふことを聞いたが、此時ばかりは人のいい良人も、流石に大變怒つて離別しようと決心したと

言ふことだ。

それにしても斯んな妻を持つた男は、實に可哀さうだと思ふ。殆んど妻の虚榮心を満足させる爲に、生涯苦しまねばならないのだから。それこそ働いても働いても追ひつゝことの出来ない境遇にするのは、すべて虚榮心の業で、最後は當然不幸な運命に陥ちてゆかねばならないのだ。

魂の深さ

人間の魂の底には何時も或るものが潜んでゐる。それが自分の感情の中に溶け込んだ時、種々な現象を呈してくる。或時は低氣壓の爲めに、重苦しい憂鬱症に陥らしめることもある。また妙に心ばかり浮き立つて、とりとめもない空想を描くこともある。また平靜な心持を懐いてゐながら、落着きのないことがある。

これはどんな人間でも、経験することだらうと思ふが、私は毎月かうした経験を二三度は繰り返してゐる。私はその度毎に何かに惱んでゐる。それがまた自分の魂の深さを知るやうにも思は

れる。

死の船

死の船よ！

おまへは今年もまた、

幾人かの善良な人々や、

幾人かの悪人を迎ひに来て、

乗せては遠く消え去る。

死の船よ！

おまへは運命と共に、

生に傷き戦に敗れた人々を、

遠慮もなくいたはりもせず、
義務的に連れ去る。

死の船よ！

おまへの影の近づく時は、

人は戦き且つ慄へながら、

その影を追ひ拂はうとするが、

運命はおまへの走るのを止めない。

死の船よ！

信仰の薄いものや、

生活に希望を失つたものは、

おまへに恐怖を感じながら、

一步一步おまへに近づいてゆく。

死の船よ！

おまへは時には、

漸く此世の光りを見た幼児を、

また年若くして希望に燃えた人々を、

運命の悪戯で運び去つてゆく。

生命の芽生

幼 年 期

一生の首途とも言ふべき幼年期、——その時分のごときは、割合に記憶が臆けで、どうかすると親や兄姉から、自分の幼い時のことなどを言はれても、『まあ、そんなこともあつたんですか？』と聞き訊すことさへある。

殊に三つ子の魂百までといふことを聞くが、多くの人は二つや三つの時代のことは、殆んど記憶に残つてゐない。四五歳時分のことになると、印象の深いものだけが、頭の隅に残つてゐて、記憶を呼び起すたびに、幻のやうに浮き上つてくる。

それが六七歳になると、ずつと記憶にハッキリと残つてくる。その時分のことになると、善悪の差別が分つて來てゐるので、殊に悪いことをしたことなどは、消しても消し失せない位に鮮に記憶に残る。

これは誰でも一度は通つて來た道であるから、自分の記憶を呼び起して見たならば、その人そ

の人の境遇に依て多少の相異はあるだらうが、どんな人でも子供の氣持の上に於ては、或る共通した心持を發見するだらうと思ふ。

この幼年期は、謂はゞ山から堀り出した石と同じで、形も魂も全く原始的のものであつて、自然に近いものだ。そこに人間の魂の純なるところがあり、無邪氣さがある譯である。だから幼年時代といふものは、人間の一生にとつて、最も大切な時代であるが、まだ自分の意志といふものがないので、周囲の人間の扱ひに依ては、植木屋が植木を扱ふやうに、どうにでもなるものだ。

そこで幼年期の教育といふことが問題なのであるが、このことについては、それぞれ専門家に依て研究されてゐることだから、私は敢て愚見は述べないで置かう。ただ此の幼年教育が現在のまゝでは不満である。もつともつと機械的でなく、人間的に實行の手を伸ばして欲しいと思ふ。

巢の中にある雛を、どんな風に育てゝ行かうか？ これは人の親として常に考へあぐんでゐることだ。しかし今日は大に實行の時代であるから、考へてばかりゐないで、家庭でも社會でも出來得るだけの實行方法を研究すべきだと思ふ。さうしてこそ始めて、幼年の教育が理想化され、眞の立派な人間を作り出してゆくことが出来るのだ。

少年期

幼年期の芽が伸びて、少年期に移ると、そこには智慧の若葉が芽ぐんでゐる。その若葉は小學校で、次第に大きくなるのであるが、若葉の性質に依ては成長振りが悪かつたり、家庭や學校の教育如何に依ては、香ばしくなくなつたりしてしまふ。

謂はゞ此の時代は、まだ自分の欲望がない爲に何うにでもなるのだ。だから男でも女でも、純な無邪氣さがある。

若葉が青々となるにつれて、その魂も次第に成長してゆく。雨や風に曝されて、どんな風にその小さい魂が育つてゆくか？ そこに眞の教育の力が現はれる。同時に家庭教育の力も試めされる譯だ。

少年時代の頭に映じてゐる世の中のこととは、すべてが夢なのだ。その夢も青春期の夢とは違つて、すつと無邪氣な純な夢だ。然も此の夢は青春期に移るまで、覺め果てぬ夢だ。

よく親の苦しみを、子供心に心配することがあるが、それも一種の夢の場面であつて、少しも子供心に譯が分らずに心配してゐるのである。

要するに少年期といふものは、夢の世界を彷徨ふてゐるのだ。所謂永久に返らぬ夢みる日である。

青春 期

青春期は、字義通り春だ。すべてが寝ても夢、覚めても夢だ。世の中が蒼薇色に見えたり、また灰色に見えたり、心持の具合で變化する。

少年期で發育した智慧は、漸く熟して來てゐるので、欲の棒を自由に振りまわすことが出来る。そしてその棒が禍ひを起すのだ。だから所謂取りかへしのつかぬことを仕出かすのも此の時期に多い。

謂はゞ熱し易くて覺め易い時期だ。余りにバツションが、あり過ぎて後悔することが多い。そ

こには再び持つことの出来ない若さが潜んでゐるからだ。前後の思慮もなく、無中になつてやることは、此の時期には誰しも經驗することだ。

また青春期は性に眼覺める頃で、男でも女でも、戀を知り初め戀の夢に浸る。戀は此の時、若い男女の胸に喰ひ入つて、自由に彼等を弄ぶ。そして彼等を喜ばせたり、怒らせたり、泣かせたり、憂鬱にしたり、微笑させたり、様々の表情をさせる。然もその後ではそつと彼等の胸から出て、薄情にも彼等から全然姿を消してしまふ。すると彼等は一時の樂しみを果敢ない夢のやうに歎くのだ。この哀愁こそは、青春期でなければ味ふことの出来ないものだ。

かくて春の花が散つて、うら淋しさを覺える時のやうな氣分を見出した時は、青春期も末になつて、若さは次第に老ひてゆく。

人生の面影

人間と運命

人間。おい、君は俺の行先をつきとめてゐるのかね。

運命。どうして、また君はそんなことを聞くのだ。

人間。いや、一寸聞いて置きたいことがあるんだ。

運命。はゝあ、分つた。君は俺が君の行先を邪魔をするとでも思つてゐるのだね。……それからそれと、はつきり言つて呉れ給へ。

人間。いや、さう言ふことはないよ。實は僕の前途に對して、君が何う言ふ考へを持つてゐるかを聞いて見たいと思つたものだから――。

運命。成る程、さう言ふ譯だつたのかね。それならそれで僕の考へを述べてもいゝさ。

人間。ぢや、どうか何もかも腹藏なく言つて呉れ給へ。頼むよ。

41 運命。僕は君の前途に光明を與へたいとは思ふが、人間が余り慾張つて、幸福を自由に不正なこ

とにまで使用するのを見ると、直ぐに不愉快な気がしてならないのだ。そこで君に邪魔するつもりではないが、人間に反省をさせるために、不幸の使を出していぢめてやるのだ。すると人間といふものは弱いもので、直ぐにまるつてしまふ。そして今まで勇氣づいてゐた人間の心は、憂ひに閉されてしまつて、何時か幸福の存在すらも、影を失つてしまひさうになるのだ。人間。さうだ。それは僕にも分つてゐる。だが、時々君は皮肉な悪戯いたづらを我々に試みることはないかね。

運命。そりや、ないこともないさ。人間が余り調子に乗つて、まるで天下を取つたやうな氣で、勝手な眞似をしてゐるのを見ると、一寸人間をいぢめて見たい氣になるのだ。併しそれは僕が自分だけで勝手にやるのではなくて、神が僕に命令をするのだからね。それは君もよく承知して置いて呉れ給へ。

人間。だけど人間の方では、慈しみある神がそんな皮肉なことをなさらうとは思つてゐないからね。それに何うかすると眞面目な正直な生活をしてゐる者にも、皮肉な悪戯いたづらをされるので、その度によく運命の悪戯だなんて、我々の方では言つてゐるよ。

運命。しかし、それは悪戯ぢやないんだよ。當然その人間が受けねばならないもので、謂はゞ持つて生れたものなのだ。それが思ひがけなく偶然にやつて來たに過ぎないのだ。

人間。すると何かね。君等の中の或ものは我々が世の中に生れ出るときから、我々の体内に潜んでゐる譯だね。そして時を構はず、その人間に與へられただけのものは、體驗させるのだね。

運命。さうだ。我々の仲間は、必ず何んな人間にも交渉を持つてゐるのだ。然も仲間のうちには絶對の權力を持つてゐるものさへゐるのだ。それこそ人間は、その權力を有する仲間に出會したら、どんなに避けようとしても駄目なのだ。ただ其の仲間と打勝つか、又は負けるかは其の人間の生命の力に依るだけだ。よく人間の中には我々の仲間と戦ひながら、常に勝利を占めてゐる勇士もある。だが、大抵は弱い人間が多いやうだ。

人間。それは事實だ。けれども時に依ては、君等の仲間のくるのを避けて通ることも出来る。さうしたことを現に經驗した人もあるので、今日では君等の力を無視してかゝつてゐる人も少ない。かうなると君等も一寸考へねばならぬだらう。

○或る男の生活の縮圖

第一景

野には
 梢に囀る
 鳥の聲ばかりで
 人の影すらもなく
 彼はただひとり
 恰も此の世に
 もう人間が住んでるないかのやうな
 静けさのうちにゐた。

彼は何も考へないで
 何を食ふ欲望もなく
 ごろごろ寝ころんでゐるうちに、
 たまらなく寂しくなつた。
 彼は急に人間の住む世界が
 戀しくなつて來た。

彼はそのまま
 どんな人間のゐる
 世界にでも
 旅を試みる
 氣になつた。

旅に出ると

右を見ても

左を見ても

森や林ばかりで

人間の作つたやうな

畑や田圃も

一向に見當らない。

彼は絶望して、

森の中に横はつた。

すると彼は飢餓を感じ始めた。

彼は水を求めようと周囲を見廻した。

だが、泉の影すらも見當らなかつた。

彼は仕方なく

身を起して

また歩き出した。

足は疲れ果て、

殆んど引摺つてゐるが、

彼の心の中には

まだ何かの望みを

抱いてゐた。

しかし行つても行つても

彼の望みは達せられさうもないと思ふと、

急に彼はがっかりしてしまつて、

生きてゐるといふことが、
堪らなくなつた。

どうかして死にたい。

死んでしまつたら、

斯うした苦しみも

あるまいと決心はして見るが、

なか／＼死ねない。

『あゝ 死といふことは

どんなに難しいことだらう』

彼は足を投げ出しながら

森の中で呟いた。

そして彼は再び

ちつと横になつて

空を眺めた。

と、何時か疲労のために

うと／＼と眠つてしまつた。

第二景

ふと眼を覺して見ると

彼の眼の前には

若い女たちが

白いエプロンをかけて

彼の周囲を往來してゐる。

彼は或るカツフェーの卓に
 倚りかゝりながら
 酔ひつぶれて
 眠つてゐたことに
 気づいた。

『あゝ、僕はまだ斯んなところにあるたのか、友人達はどこに行つたらう！ さあ、僕も出掛けよう。』

『まあいゝぢやないの？ ゆつくりしていらして。』
 エブロンをかけた
 色の白い可愛い眼をした
 若いウエートレスが
 彼の肩を叩く、

彼はまた飲み初める。

二度目の酔ひから
 醒めたときには
 彼は情婦の傍にゐた。
 そして懷中を
 さぐつて見たとき
 彼は急に後悔した。

『何故、こんなところに
 来たのだらう！
 もう再びこんなところへは
 足を踏み入れまい』

彼は斯う心に誓つて、
その家を出た。

第三景

彼は毎日自分の
業務に精出して
そして立派な家を建て、
美しい女を妻にした、
彼の理想の生活は始められたが、
彼の希望と目的とは
彼になかなか満足を與へなかつた。

彼は自分の理想の實現に

離解としながら

苦しい體驗を嘗めたが、

寧ろ運命は皮肉に

彼を斷崖から突き落した。

第四景

彼は根底から

生活を築かうと

再び眞實の道を

歩き始めた。

彼にはその時

もう二人の子供があつた。

彼は子供の爲めに
絶えず働いた。

彼は人の父親として
一家の主人として
自分が相當の資格が
あるか何うかを心に問ふて見た。

そして責任の重さを
つくんと感じたとき
人間といふものゝ價値が
自分の心を苦しめた。

第五景

彼は再び人間の世界から
ただひとり野の中に
歸つて行かうと
街を後にした。

野には清らかな
小川が流れてゐた
彼は咽喉をうるほす爲めに
小川のほとりへ下りて行つた。
そしてふと水の流れに

自分の妻が寫つてゐるのを見て、
彼は今更に驚いた。
髪は白く、顔には皺が――。

然も墓場は
野の果てに
彼を待つてゐるかのやうであつた。

下には何人か居るが、
はるかに遠くへ
いんぷん
ひもたさ
はるかに遠くへ
いんぷん
ひもたさ

凡人

夫婦の生活

男

俺も何時か此處まで逃げ込んでしまつた。
生活の波に追はれ追はれて――。

女

妻があなたの後に従いて
逃けるのに、どんなに苦勞したか。
あなたは御存じないでせうね？

男

そりや、知つてゐるさ。
だが、それは俺とおまへとの運命なんだから……。

女

運命！ 矢張りさうでせうか。

だけど、妾は何うしても運命の聲を聞いただけでは、何だか諦められません。何か、否何者が、わたし達の影に潜んでゐるやうな気がしてなりません。

男

それはおまへが俺を信じてゐないからだ。

愛する男を信じてゐないからだ。良人に愛を捧げ切つてゐないからだ。

わが人生日記より

一月一日。

私は私の人生の道程を、五十里乃至七十里と假定すれば、今年は三十四里の里程標に立つてるのだ。

私はその里程標の前に立つて、先づ自分の生活の徹底を痛感してゐる。それには何事にしろ、良くて悪くても、あるがまゝを感じて、自分で自分を痛感することだ。そして始めて他人が痛感してゐることまでも、その何であるかを察知することが出来るのだ。その感じの中には、誤魔化しもなければ、偽善もなく、また皮肉もない譯だ。それより他に、自分の生活を徹底する道はないと思ふ。

一月六日。

61
生きる爲めに人間は、あらゆる苦痛を嘗めねばならない。それが自然に考へられる場合と、寧ろ反對にそれほど苦しまなくとも、生きてゆく方法がありさうなものだと思ふ場合とがある。

そして生きてゆくと云ふことだけだつたら、もつともつと單純な生活法がありさうなものだと思つたり、またもつともつと自分は苦しまねば駄目だと思つたりする心の變化を、一種の低氣壓のやうに考へて見る。

一月八日。

私は何時も運命の開拓といふことを考へてゐる。その癖、避けようとしても避け得られないのが、運命ではなからうかとも思ふ。

また避けようと思ふよりも、寧ろ温順しくその運命に服従して、その中から自己を開拓してゆく方が、真によりよき人生の勇しい戦闘ではなからうかとも思ふ。

一月十日。

私は愛するといふことほど、むつかしいことはないと思ふ。殊に他人の子供を、自分の子供に對すると同様に、愛してゆくといふことは、なか／＼實行の出來難いことだ。その愛には多くは

ごまかしがあつたり、偽りがあつたりする。

また他人を愛する場合、自分は心から愛するつもりでも、對手が素直にその愛を受け容れないことがある。

一月十三日。

自分の心を知ること、他人の心を知ることよりも難しい。況して自分の心を他人に理解させることは、もつともつと至難なことに違ひない。

x

私は孤獨を感じる時、何時でも何かを思索する。

一個の人間にとつて、思索ほどその人の思想を深くしてゆくものはないと思ふ。だから、どんな多忙な生活の中に身を置いても、時折は必ず僅かな間でも、思索の時を得たい氣がする。

一月十五日。

人間は感情に生きる日が多い。殊に人並以上に神経の過敏なものにとつては、毎日毎日の天気ですらも、その気分が違ふものだ。

だから、さうした人間にとつては、境遇や周囲の關係もあるであらうが、明るい氣持といふものは、滅多にあるものではない。

一月十七日。

儀式的なことが、私は大嫌ひだ。

しかし人間は社会的に行はれてゐる儀式には、知らず識らず、若くは意識してゐて、それに囚はれてゐることが多い。

一月十九日。

✓ 目的といふことは、自己を標準として、進むべき方向を意味する。そこに目的の眞の意義が見出される。

x

未知の前途に對する希望も、目的さへしつかり掴んで居れば、次第に輝かしいものとなる。それには勇氣と努力が必要だと思ふ。

一月二十一日。

✓ 前途の不安、現在の不安、瞬間の不安、さう考へてくると、實際生活そのものに對して、常に不安が伴つて心は動搖してばかりゐる。

だが、人間は生きてゐる間は、何かの不安を感じずにはゐられないのだと思ふと、不安の恐怖は薄らいで、心は次第に落着いてきて、生活に勇氣が出てくるものだ。

一月二十三日。

人間には慾がある。慾があればこそ、生きる力も出てくる譯だ。どんな頻死の病人でも、生きたいといふ慾は消えない。

どんな境地にあつても、何かの慾が、人間の心を支配してゐるのだと思はれる。

一月二十四日。

誰しも理想の生活は望むところだが、なかなか容易ではない。しかし思ひ切つて、それに突進すれば夢が現實化されないこともなからう。たゞ問題は果してその理想が、現實に直面して、永續するか何うかと言ふことだ。

一月二十五日。

貞操は女にのみ大切ではないと思ふ。男にだつて貞操はあるのだ。謂はゞ人間には、誰にだつて貞操はあるのだ。たゞその貞操を重要視してゐる人と、無視してゐる人とで貞操観が相異なるのだ。

一月二十七日。

人間には熱即ちパッションがなくては駄目だ。何事をするにも、熱が失はれては、もうおしまひだ。熱心といふことの價値は、最後まで人と事業とを生かすところにある。だから如何なる場合にも、熱のある人は事業の中心人物となるのだ。

一月二十八日。

歡喜の瞬間こそ、人間の最も幸福な時だ。實際その瞬間だけは、心の隅にさへも愛ひの影は認められない。

x

しかし悲痛に打たれた時ほど、人間は不幸が呪ひたくなることはない。可なり悲痛に打勝つ力を相當に持つてゐる人でも、まるつてしまふことが多い。しかし、時に悲痛は、人生に於ける魂の試練だと思ふ。

一月三十日。

受けた恩を返さねばならないことは、言ふまでもないが、恩は決して満足に返さるべきものではないと思ふ。借金ならば、それを二倍にするか、相當の利子を附けて返せば済むが、恩は精神の上に心の跡深く印されてゐる以上、永久に消すことの出来ないものだ。

信仰と感化

カインの罪

この地上に最初に生れ出たアダムは、確かに善人であつたに違ひない。しかし其妻エバに出来た最初の子カインは、その母の血を享けて、確かに罪の子であつた。カインが何故に其弟のアベルを殺してまで、自分の欲望を達せんとしたか。そこには母の犯したと同じ罪の血が、彼の血管に流れてゐたからではなからうか。

けれども罪の子カインにも、父アダムの血は享けてゐた。彼はエホバの神に、

『汝何をなしたるや汝の弟の血の聲地より我に叫べり。されば汝は詛はれて此地を離るべし此地その石を啓きて汝の弟の血を汝の手より受たればなり。汝地を耕すとも地は再び其力を汝に効さじ汝は地に吟行ふ流離子となるべしと』

と責められた時に、彼の良心は雷に打たれたやうに、『我が罪は大にして負ふこと能はず』と、深く深く後悔の言葉を心から發してゐる。同時に彼は自分の身の置きどころもないやうに煩悶の

聲を出して、

『視よ汝今日斯地の面より我を逐出したまふ我汝の面を覲ることなきにいたらん我地に吟行ふ流離子とならん凡そ我に遇ふ者我を殺さん』

かう言ひながら、既に彼は自分の身の審きを覺悟してゐる。惡に強い彼の良心にも、眞の光は消えてゐなかつた。彼の魂は暗い闇の中から、一道の光明を認めて、悔い改めるまでに至つたのである。

そこに眞の人間の魂がある。人間は生れ出た時は等しく皆善人だといふ言葉があるが、併し生れ出たばかりの幼い魂の中にも、カインのやうに親の罪の血を幾分でも享けてゐることは争はない。さうして其の血管に流る血が、子の成長に伴つて、時々頭を掻き、知らず識らず罪を犯すやうになるのだ。

かうした罪の心に打克つには、しつかりした意志と、克己心がなくてはならない。それには何うしても教育の力や、一面には宗教の力、讀書の力が大きい影響を與へるだらうと思ふ。カインのやうな無學な農夫ですらも、宗教の力で、遂には眞人間になることが出来たのだから。

ノアと洪水

『エホバノアに言たまひけるは汝と汝の家皆方舟に入れし我汝がこの世の人の中にてわが前に義を視たればなり』

エホバの神はノアに斯う言つて、彼等を避難させた。それは確に神の慈しみには違ひない。しかし、また神が與へ給ふたノアの運命だとも、言へば言へるだらうと思ふ。

ノアは實に當時の最大の幸運兒であつたのだ。彼が獨り神の寵兒として選ばれたといふことは、何だか不自然のやうな氣がしないでもないが、ノアの眞實の行爲が、果して神の御意に叶つたものとすれば、當然與へらるべき運命のやうにも思はれる。

ノアは神を信じ、神も亦ノアを信頼した結果、人間の惡行を警しめる爲に、洪水が計畫された違ひはない。洪水に依て人間の不幸と、幸福とを極端に人間に經驗させたのは、エホバの神の試みであるが、それは人間生活と運命とに關する大きな比喩の物語である。

それに依て神が人間に對する力の偉大なることを示し、同時に、それほど神は自分に反逆する人間を厳しく處罰することを示した譯である。だから、人間はノアの如く、神に信頼されるやうに、常に神に忠實でなくてはならないことを警告された言葉だらうと思ふ。

謂はゞノアといふ一人物は模範の人物として、神が人間の典型を世の人々に示して、そこに運命の恐怖を思はせ、信仰の力の偉大なることを豫告されたものに違ひない。そこには人間をして信仰に導く力が溢れてゐる。私は舊約書の中で、最も力ある頁だと思ふ。

基督の生活

基督は三十歳になるまで、殆んど沈黙の生活を續けた。それは彼が人間生活の試練の時代であつたに違ひない。彼は三十年の間、人間一生のあらゆる経験を嘗めて、始めて神の子として福音を傳へ得るだけの自信が出來たのではあるまいか。

基督の生涯は前期は小羊のやうに牧場の一隅に、黙々としてあるか無きかの状態であつた。

が、ひとたび彼が起ち上つて世の中へ出た後期の目ざましい生活振は、恰もライオンが檻を出て自由に野山をかけまはるやうな華々しさがあつた。彼が何者をも恐れず、人類のために神の福音を日夜述べ傳へた精力は、到底普通の人間の出來る技ではないと思ふ。多くの弟子たちが、師の精力の旺盛なのに驚いて、幾度か師の許を去らうとしたと云ふことなどは當然あり得べきことである。そこにも普通の人間と、基督の偉大さが認められる。

基督は何時も自分の生活は、一般人類を救ふための生活に他ならないことを信じてゐた。それは聖書に依れば、神から與へられた生活だとしてあるが、基督自身の心には絶えず、さうした考へがあつたからでもあらう。然も基督が世の中に出た出發點は、確にそこにあつたと言つてもいいのだ。

基督は自分の生活を最も有意義なものとした一人である。僅かな間に彼ほど偉大な生活をした人はない。一生涯の終りに於て、彼ほど輝かしい生活を營み得た人はない。殊に彼ほど眞實に充ちた聖なる生涯を終つた人はない。そこに悠々とした死の喜びがあつたのであらう。

我々は基督の十字架を思ふ時、苦痛の極を越えて、死の喜びの漂ふてゐる聖き死を尊く思ふ。

同時に基督の死は、永遠の死ではないやうに思はれる。

釋迦の歩いた道

私は釋迦のことについては、多くを知らない。しかし釋迦の歩いた道は、自分にも理解出来る。それは基督と同じやうに、大きな愛を基調としたものだ。

佛陀の偉大さ、即ち釋迦の偉大さは、その魂の底に限なく照らす愛があつたからだと思ふ。思ひやりの深さの點は、東洋的であつて、吾々日本人の氣持には、實にびつたりと合致する。さうしたところから、佛教の方が、日本人には早わかりがして、その説教も有難く聞ける譯である。

釋迦がどんなに自分を犠牲にして、他人の爲めに盡したか。それは數々の彼の行ひが、人々をして心から感心させずには置かない。

トルストイの教化

トルストイの晩年に一つのエピソードがある。それは或る日、著作に疲れた彼がヤスヤナボリヤナの草廬を出て散歩に出かけた時のことだ。彼は一人の賣淫婦に出會した。そこで彼は直に其の賣淫婦を自分の馬車に乗せて小料理屋へ行つた。そして一時間ばかり女の顔をデロ／＼と眺めた後で、女に教訓の言葉を認めて歸した。女はそれを讀んで改心して清い労働生活に入つたさうだ。ところが最近これに似通つた話が、東京の場末にあつた。或るカフェーの女給が、客からトルストイの民話を貰つて讀んでゆくうちに、汚れた夜の生活を厭ふやうになつて、主人に暇を乞ひ、暫らく故郷に歸つてゐるが、此程非常な決心をして信仰生活に這入つたさうだ。死後のトルストイの教訓亦偉大なるかなである。

詩人シエリーと人生の夢

英國の情熱の詩人シエリーは、若い時分、或る喫茶店の娘と戀に陥り、遂に結婚しようとしたところが、父の反對を買つて年二百磅の仕送りを断られた。然し彼は花のやうな少女を思ひ切る事が出来ず、父と絶交して結婚してしまつた。彼等は結婚後、理想の幸福に酔うたが、熱し易く冷め易いは詩人の常で、幸福な生活も子供が出来ると間もなく破壊され、家庭の不和は絶えず、妻は到頭子供を連れて逃げ出した。この時詩人シエリーは始めて、現實と理想との夢を破られ、人生に對して深い憂鬱を感じるやうになつた。その時の彼の心を慰めたものは自然のみであつた。

西郷さんの人間味

西郷さんのやうな英雄の魂にも、人間共通性の弱さは確に持つてゐたに違ひない。そこに眞實

の人間味がある譯だ。

かの大島流刑時代や、西南役前後の西郷さんの魂には、人間味以上の人間味があつた。翁の魂の底には、常に人知れぬ悩みがあり、また隠し切れぬ涙があつた。

華かな過去の生活を思ふ時、翁のやうな偉大な人の魂にも、憂愁は雨雲のやうに暗く襲ふて來た。さうした寂しさを泌々味つた心こそ、眞に人間味の溢れたものであらう。

一個の英雄として、世の人々に尊び崇められてゐた當時の西郷さんは、人間味を離れて常に一段高い處から、人間の心を蔑視してゐた。弱さといふ弱さを經驗する暇がなかつた。誇りと輝きに馴らされた魂には、人間共通性の弱さはあつても、それを眞に味ふ機會がない爲に、知らず知らず強い人間になつた氣がするのだ。それは一種の誇らかな氣分であつて、英雄とか偉人とか云はれるやうになつた人間の共通性である。

恰度ナポレオンが、世界を征服する夢を見てゐた當時などは、最も英雄としての誇りを極端に心の表面へ現はしてゐたのだ。彼は自分を一種の神に近い人間としてゐた。彼は人間の強さは、武力で何うにでも出来るやうに思つてゐた。しかし一度世界征服の夢から醒めて、コルシカの一

孤島に身を置いた時は、矢張り弱い一個の人間であつた。彼の燃ゆるやうな理想は、何處へか奪ひ去られてしまつて、ただ生きるといふことのみが、彼の唯一の望みであつた。生きてさへ居れば、再び自分の胸に潜んでゐる理想を實現することが出来るだらうと信じてゐた。

それは西郷さんが、大島に流刑の身となつて、悶々の情に日を送つてゐられた時分の氣持と同じではないかと思ふ。あの當時の西郷さんの胸には、幾多の理想が焔のやうに燃えてはゐるが、強い克己の翁には、すべてに打勝つて、生きるといふことに輝かしい希望を繋がれてゐた。

人間が身の自由を失つた時、始めて自分の弱さを知るやうになるといふことは、運命に人間が支配されるといふことを意味してゐるかも知れないが、一面には人間味を十分に味ふ機會が出来て、更にその人の魂を深めることにもなると思ふ。

西郷さんの最後まで一糸亂れざる道行こそは、實にその魂の深さから來てゐるのではあるまいか。翁の魂の底には、泉のやうな人間味が溢れてゐたことは、かの十年戦役當時の氣持だけでも、想察することが出来るやうに思ふ。翁は賊軍の大將として、何ういふ心持を抱いて居られたであらうか。あれほど維新の忠臣として、熱意の溢れた行動をとられた翁の胸中が、如何に苦悶

に苦悶を重ねられたかは、何人も略ぼ想像することが出来ると思ふ。

一説に於ては、翁は薩藩の子弟や、有志の反逆の犠牲になられたのだとも傳へられてゐるやうに、そこに私は常人に見られない人間味があつたからではないかと思ふ。要するに西郷さんの人間味といふものは、その一點だけでも充分に價値あるものだ。

理想から現實へ

理想と現實に生きる悩み

三月某日――。

M兄。

世にも嬉しいお便りを頂きながら、又ぞろ引きずられるやうに、今日になつてしまいました。遠い昔の友の中で、今も尙ほ昔を語り、更に未來を契つてゐるのは、ほんとうにあなた一人つきりなのです。後から後からと新しい友が、面倒なほど澤山生れてまゐりますけれど、修養の足りない私には、どうも胸が割られません。萬人を友として、自分一人の如く交ることが出来る日は何時のことか、それは死の償ひによつてのみ、私には許さるべき悪逆人なのでせうか。

近頃ともすれば、對人の關係がもどかしくつて、孤獨を守つて、隠れたいやうな気がしてならないのです。その癖人一倍も二倍も人がこいしいのに、世がなつかしいのに、抱きつきたいほ

ど吸ひつきたい程の愛着を痛感してゐるのに、そして大きい生の欲求に、愛の實現に志してゐるのに、働きかかれれば何時も、人を傷けてしまひます。矢張り私が弱いのか、又は柄にもないことを志してゐるのか。しかし愛するといふことは、ほんとうに愛するといふことは、私にとつて生くること、ほんとうに生くることだとすれば、私は迎も遣り切れない氣がします。私は決して世の所謂偉くなることを望んでゐるません。唯たつた一人のこの可愛い自己を、眞實に萬全に育んでゆきたい。そしてたつた一人でもいゝから、眞に己れを忘れて、人を愛し得る境地にまで上つてゆきたいものだ。私達はただ一個の人間であればよい。さうです。さうです。ただ一個の人間、私はもう一度あなたの仰言つた御言葉を繰り返して、つつましく胸をさすりながら、生の欲求に徹底してゆかねばならないと思つてゐます。あなたと私、どうした因縁やら……結ばれた人生の同じ一すぢの道を辿つてゆく二つの姿、過去に於て、現在に於て、よしやその影は細くとも、我等の内心に燃ゆる尊いものを愛し育んで行つたら、いつかは何時かは「今こそ自分は生きてゐる」と言へる時が来るに違ひない。斯う思ふとき、はち切れるやうな生命の力が、ほとばしるではありませんか。この力を尊いものに傾倒傾注して勇ましく進んでゆきませう。

私がこの友人の手紙を受取つたのは嚴肅な静けさが涙となるまでに、心に逼つて来るやうな冬の朝であつた。私は待ちに待つた友人Fの手紙を手に取りと食らやうに幾度か讀返した。そして物質的の生活に溺れ、知識階級の名ばかりの空虚な生活に囚はれて、徒らに生命を磨滅らしてゐるよりも、どんなに詰らない仕事でも、眞實に自己を生かす仕事をして見たいと思つた。

私はFの手紙の一字一字が、どんなに自分の胸に喰ひ入つて来たかを思つた。私の心の底に流れてゐる血は、俄かに躍動して来た。そして何だかちつとして居られなかつた。自分の爲すべきことは澤山にある。私は何時もそれを忘れはしなかつた。とは言へ、たゞ思つてゐるばかりで心に計劃されたことは、殆んど手もつけてなかつた。私は其日の日記に斯う書いた。——私は生活の爲めの勤めに、毎日離脱してゐる自分を何時も憐れに思ふ。そして時折自分の心に質問する。

「お前は何の爲めに生きてゐるのだ。何の爲めに？」

「この世はお前の爲めに、最も懐しい生の世界だ。そこには希望もあり、戀もあり、また無限のあらゆる慾望がある。お前はそれを一體何うしようと云ふのか？」

「お前の生の存在してゐる世界の人類は、今お前が求めてゐるものと同じもの、或はそれ以上のものを望んでゐるのだ。お前はお前の理想に向つて、何故躊躇してゐるのだ？ 世界の人類の爲めに、何故お前は自己を犠牲にし得ないのだ？ お前はたつた一人の人間、たゞ一人の自己をも愛することが出来ないのか？ それが出来ないで何うして憐人の愛を叫び得ようぞ？」

この質問が今の心にも頭を擦けてゐることを私は知つた。Fの心の悩みはそれだ。それはFが常に幼い子たちを相手に、教育と云ふものゝ重大なことを思へば思ふほど悩まねばならない眞理だ。Fは人の子の教育と云ふことに對して、經驗が積めば積むほど自分の心の悩みを大きくすると言つてゐる。Fの人生の悩みの根本はそれなのだ。

Fの手紙には何時も自分は藝術にも走りたいし、それかと云つて生活の安定を得るには、矢張りこれまで踏んで來た道を、進むより他に仕方のないと云ふことを痛切に感じてゐると云ふことが書いてある。

それは一種の皮肉な運命だ。人間はさうした場合、餘程大膽に自己の足下を見ずに飛ばねば、どんなことをしても其足場を踏みはずすことは出来ない。Fの心は今其足下を覗めながら躊躇し

て、飛び難い焦燥に一刻一刻と時の迫るのを待つてゐるのだ。と同時に私も亦、その階段に足をかけて自分のもどかしさに心を苛立たせてゐるのだ。

あゝ今二つの心は皮肉な運命を眺めながら、岐路に迷つてゐる。迷へる羊は野を越え、術に入るとも、自分の運命に終始せねばならないのか。否々運命に反抗しても、自分の理想に到達するの目を実現せねばならない欲望は、二つの心の中に最後の燈火が消えるまでは、残つてゐるに違ひない。

失職してゐる友へ

『職を失つた時の氣持ほど、生活に對する勇氣の乏しいことはない。』

君の此の言葉は、實感から來てゐるに相違ない。それは誰しも弱い人間の感ずるところだ。謂はゞ生活の火の燃料が乏しくなつて、消えかゝつてゐるのだから。

しかし、さうした氣持も一時であつて、時を経るに従つて、自分の周圍か、又は自分の心の底から、眞に生きようと言ふ欲求が湧き上るものだ。その時がくれば必ず、

『人間は何をしても喰つてゆける。』

と言ふ自信が胸に溢れてくる。その時こそ本當に自分が生活に眼覺めて、起ち上る時なのだ。

例令これまで会社に勤めてゐたやうな樂な生活は出來なくとも、生活に自信があり、生活に希望のあるものであれば、進んで獨立した生活を營むがいい。

働くことに興味を持ち、働くことに骨惜みをしなければ、何だつて出來ると思ふ。私は毎朝私

の家に出入する八百屋や魚屋などが、何んな雨風の烈しい日でも、雪の降りしきる日でも厭はず御用聞きにくるのを見ると、眞に生活の戰鬪を眼前に見るやうな氣がする。實際新しい希望に輝く生活は、さうしたところから生れるのではないかと思ふ。我々はさうした目ざましい人生の戰場にある人の働き振りを見てゐると、何だか自分が意氣地ないやうな氣がする。

血みどろになつて働いてゐる人間の生活こそ、眞に生きてゐるのだ。そこには生きてゐると言ふことに、言ひ知れぬ意義の深さがあるのだ。

友よ、どうか此の意氣込みで働いて呉れ給へ。さうして働いてゐるうちには、屹度幸運が君を待つてゐると思ふ。たゞ働きを見出すまでは、ぢつと心を落着けてゐることだ。さうでないとうかすると、職を離れてゐる人間には兎角さもししい心が起り易いものだ。

しかし、これは私の老婆心から、最後につけ加へて置くだけのことで、決して心に留めて呉れ給ふな。では要領を得ないがこれで失敬する。

幼年教育について

— 或る教育家へ贈る —

幼年時代の家庭教育といふことが、幼い魂を育む上に、何んなに重大なものか、それは恰度一本の芽を育てて、立派な苗にするのと同様の苦心を要する。

それに就ては此の重大な幼年時代に於ける、現代の教育の設備が第一の問題であり、また家庭に於ての教育が何の程度まで、親の手で出来るかといふことも考へねばならない。

それを思ふ時、私は現代の幼稚園なるものに對して、眞の幼年教育所として甚だ飽き足らなく思ふものである。現代の幼稚園は謂はば中流以上の家庭の幼年教育を主としてゐるもので、それすらも満足に行はれてゐないやうに思ふ。

それは經營上から月謝を要求せねばならない爲めに、中流家庭を本位にする傾きもあるだらうが、もう少し社會的に如何なる家庭の子女でも、教育するやうな設備は出来ないものであらうか。

かうしたことは國家が、現代のやうに個人や法人團體等に任せないで、一の社會事業として、小學校の義務教育同様に、範圍を擴げて欲しいと思ふ。これは私の理想論に過ぎないが、近き將來に於て、それが實現されることを切に望んで已まない。

人生とユーモア

— A 兄へおくる —

人生にユーモアの必要なことは言ふまでもありますまい。ユーモア即ち笑ひがなかつたら、人生は何時も悲劇ばかり繰り返されて、人間は常に窮屈な思ひをして、苦の世界に生きねばならぬと思ひます。

さうしたことから喜劇のやうなもの、また漫画のやうなもの、時代の要求につれて生れ出るやうになつたのでせう。同時に總ゆる藝術の上に、ユーモアを取り入れることになつて、現代ではユーモアのある作品は、全く完成されたものだと言はれてゐます。

例へばトルストイの作にしても、ユーゴーの作にしても、ゲーテの作にしても、その中に描かれた人生には必ずユーモアに富んだものが多いやうです。我が國でも西鶴を始め、近代の夏目漱石氏などは、ユーモア文學の大家と言つていゝ位で、漱石氏の『坊ちゃん』や、『吾輩は猫であ

る』等の如きは、その代表的作品と言ふべきでせう。時にユーモアを多量に取り入れた作品は、往々にして低級なものになり勝ちですが、高級な氣品を失はないところに作者の手腕が認められるのだらうと思ひます。

喜劇にしてもモリエールの『ドン・ジユアン』の如きは、人生に多量のユーモアを盛つたもので、どの場面を見ても、民衆の心を掴んで離さないところがあります。また喜劇役者で言へば、最近人氣の中心にある活動俳優ロイドの藝などは、ユーモアを高尙に生かすに巧みで、同じ喜劇俳優チャップリンなどが、殆んど同一の題材のものをやつても、何處か下卑たところがあつていけないやうです。併し見る人に依ては却てかうしたものが好まれる場合もあるのですから、一人位チャップリンのやうな役者もあつてもいゝかも知れません。

ただ人生の深さを見せるのには、もつとユーモアの取扱ひ方が、上手にならなければ、直接人の心に響く力が薄弱ではなからうかと思ふのです。

その點で漫画などは、生きた社會の生活をスケッチするのですから、畫の上手下手に拘らず、人心に及ぼす影響は多大だらうと思ひます。漫画に描かれた人生こそ、ほんたうにユーモアの溢

れたものではないでせうか。私はさうした考へから、今度生れた日本漫画家聯盟の發展を祈るものであります。

運命に呪はれた人々

(1) 病める大學生

夜明け方になつて、うとうとした私は、『京都！京都！』と云ふ驛夫の聲に呼び起されて、夢から覺めたやうに窓外を眺めた。仄かに明るい窓外は、深い朝霧に掩はれてしまつて、街々の屋根が墨繪のやうに、ほつりほつり浮んで、遠くに見える森は薄墨色にほかされてゐた。

私は睡眠不足で可成頭が重かつたので、些程食慾を感じなかつたが朝飯を濟ませようと思つて辨當と茶を買つた。そして急いで洗面所に行つたが、既う水が全く無くなつてゐたので、次の驛に着くまで待つて食事をとることにした。私は辨當を編み棚の上へ乗せると、ほんやり腰を下して、自分の前の空席へ乗り込んで來た青年の方へ視線を向けた。その青年は二十五六で色の蒼白い顔の鐵縁の眼鏡をかけた男であつた。紺の羽織と着物を着込んだ様子から見て、私は屹度京都の大學生に違ひないと思つた。私は自分の學生時代のことなどを胸に描きながら、不圖言葉をかけた。

『何方へ御出でです。』

『あの……九州です。』

『九州は何處ですか。』

『熊本です。』

『あ、熊本ですか……さうですか。』

私が斯う言つて微笑を洩すと、大學生は眼鏡の曇りを拭ひながら、

『あなたは何方へいらつしやるんです？』と問ひ返した。

『私はあなたより、もつと遠いんです。鹿兒島まで行くのです。』

『あ、さうですか。そりや大變ですね。そして何處から御乗りになつたんです。』

『昨夜おそく東京を立つて來たんですが、道中が遠くて遣り切れません。何しろ二晝夜汽車に乗り通すんですから——』

『さうですね。實際乗り通しぢや御疲れになるでせう。僕等は京都から郷里まで歸るのでさへ、劫で仕方がありません。』

『ええ。全く急ぎの旅だと仕方がありませんが、さうでなけりや大阪あたりで一泊すると、餘程身體も樂なんですがね。』

私が斯う言つた時、大學生の顔には私が何の爲めに、旅を急ぐのだらうと云ふ疑問が見えてゐた。尤もそれは自分自身が、さうした急ぎの旅をしてゐるからでもあつた。私は後で此大學生の口から直接に聞いたのであるが、彼の話によると彼はこの二ヶ月前まで京都の大學に在學してゐた男である。一昨年秋、彼は郷里から送金の道が途絶へてから、あらゆる苦學の道を講じて身體に無理をした結果、到頭健康を損ねて取り返しつかぬ病を得て、學校をも退かねばならなくなつたばかりでなく、養生すらも出来なくなつた。そこで一二ヶ月は友人や知己の世話になつて養生をして見たが、それでも快復の見込はなく、また何時までさうさう他人の厄介になつてゐることも出来ないで一旦郷里へ歸ることにしたのである。が然し郷里には一昨年實母が死んでから最近彼の爲めには繼母となる人が遣入り來んでゐるので、迎も郷里に歸つたとて養生と云ふ養生が出来ないことは勿論、死期を待つに過ぎないことも彼は信じてゐた。尤も彼の父と云ふのは小地主であつたが、却々田舎では才氣のある人で私慾に強い男なので、今では田地の賣買や何かで

相當の資産も拵へてゐるらしい。然し資産の増殖されるにつれて、父の慾は益々根を擴げて、彼の學資を賈ぐことを惜しむやうになつた。それには大きな原因があつた。始め彼は彼の父が母の死以來急に其態度を一變したやうに思つたのであるが、種々調べた結果彼の學資なるものが、彼の父から直接出費されてゐたのではなくて、實母が父には内密で自分の里方から工面して送つてゐたことが分つた。彼はその時母の愛に對して、限らない感謝をすると共に、母の死に對して言ひ知れぬ悲痛を感じたのであつた。そして自分の遊學に對して始めから反感を抱いた父に對して、限らない憎惡の念に燃えたのであつた。彼は幼い時から殆んど父の愛を感じたことがなかつた爲めか、彼の心の底には何時も父に對する反感が伴ふてゐた。かくて母の生前は母の愛に繋がれて、父に對する感情も平和に過されたが、母の死と共に學資の途絶した理由を知つてからは、何うしても父を憎惡せずにはゐられなかつた。然も其憎惡する父の前に病める身を跪かせることは、彼としてこれほど苦痛なことはない。併し今の彼は、それをも敢てしなくてはならなくなつたのである。謂はゞ彼はただ運命の前に服従させられてしまつたのだ。

私は彼の話聞いて深く深く心を動かされた。そして一面識の青年の胸中に同情しながら、思

は薄命な青年の境遇に泣いた。

— 旅の日記より —

(2) 戀に狂ふ女

御存じか知れませんが、田舎は盆と云ふと大變な騒ぎをして賑ひます。恰度其盆の十五日の晩は、私の郷里の方でも様々な装束をして盆踊りと云ふものをやる習慣になつて居ります。で私も久し振に其の夏歸省してゐましたので、従妹達と一緒に、町の方へ盆踊を見に出掛けたものです。町ではもう此處に一團彼處に一團と云ふ風に晴衣や浴衣ゆかたを着た老若男女の群が取り圍んで見物してゐました。さう云ふ中でドン、ドン、ドン、カラツコ、カラツコ、カラツコカと云ふ音頭をとる太鼓の音は、殊に囃子唄の切れ目に、強く強く人々の耳に響くのでした。皆が熱心にそれを見てゐると不圖見物人の中から、一人の若い女が其太鼓の音頭につれて踊り出して、急に踊る人達の方へと近付いて行きました。見物人の方では、それを見ると、「あの女は狂人だ」と云ふ聲が何處からともなく起りました。さうして見物人は其狂女の方へ寄つて行つて、踊もそつちのけになりました。併し間もなく狂女が一緒に來てゐた身内の人に連れられて行つてしまふと、また

踊が始りました。すると今度は踊のある場所から少し離れた通りの方で、人々の喧騒の聲が聞えて、何時の間にか見物人がドヤドヤと其方へ走つて行きました。私も何事だらうと思つて、其の人達の後からついて行つて見たんです。

すると如何でせう。周圍は黒山のやうに人ばかりで、却々寄りつかれさうもないんです。併し人々が口々に男は氣絶してゐるだけだとか、女は咽喉を突いてゐるらしいとか言つて騒いでゐるので、漸く其場の光景が私にも分つて來たんです。間もなく巡査が人を分けて這入つて來て、二人の倒れてゐる男女を二枚の戸板に載せて醫者の家へつれて行きましたので、其男と女を見ることは出來ませんでした。後で聞くと其女と云ふのは先に盆踊の中へ踊り出して行つた狂女だつたんださうです。そして其の對手の男は以前に其狂女の戀人だつたさうですが、急に男の方で他の女と結婚して、其の狂人になつた女を捨ててしまつてゐたのださうです。それが爲めに其女は氣が狂つたらしいのです。それから肝腎なことを言ひ落したが、其の狂女は盆踊に來た時は、既に短刀を用意してゐたものと見えて踊の場から離れると、眼前に其の戀人だつた男の歩いてゐるのを見たもんだから、短刀を抜いて切りつけたんです。そして自分で自分の喉を突いたらしいんで

す。尤も男の方は傷は浅かつたが女は醫者に行つて、一時間ばかりすると絶命したさうです。これで見ると全く女の一心と云ふものは、恐しいものです。何でもまだ其女が氣の狂はない前ださうですが、切り突けられた其男と他の女とが料理屋で、祝言の披露をしての歸り路を途中に待ち伏せして、夢中になつて花婿花嫁の乗つてゐる車の後を追つて、背後から車にすがりついたさうです。すると生憎その車に乗つてゐた人が花婿ではなくて花嫁だったので、若い嫁さんは一寸顔を向けると身震ひしたさうです。

その時彼女が何とか口の中では言はうとすると、急に車夫に突き放されたので悔しまぎれにまた花婿の車を追かけたが、到頭追付かなかつたさうです。それから間もなく氣が狂つたのださうですが、男の方ではどんなことをするか知れないと思つて、恐怖を抱いて暫らく結婚した女と身を隠す爲めに、他縣へ行つてゐたのださうで、其の夏久し振りに歸つて來てゐたところだつたさうです。

其男と云ふのは畫家で、一寸男振りもよかつたが、浮氣で料理屋なんかへも、初中遊びに行つたらしいんです。狂女になつた女と云ふのは、其惡意にして遊んでゐた料理屋の主婦の妹だつた

んださうです。それで遊びに行つてゐるうちに出來合つて、夫婦約束までしたとか云ふんです。ところが男の親の方では餘り嫁としては氣に入らないし、それに愈よとなつて血統を調べて見たところが、其の狂女の郷里の方の人から血統が悪いと言ふことを聞いて、到頭破談にしたらしいんです。血統が眞實に悪いと言ふなら、それも理屈はありますが、一旦關係して結婚する段になつて、さう云ふことを言ひ出すのも男の方で薄情だと思ひます。皆んな何と思はれるか知らないが、私は矢張り何と言つても手を出した男の方が悪いと思ひます。それに女の方では一旦操を破つて自分の身體を男に任せたからは、そこに強いところがあります。假令男が逃げようと思つても、逃がすものかと云ふ意地がありますから。尤もそれも氣の弱い女では出來ませんが、狂人にでもなる女は、神経過敏な勝氣な女に相違ないですから。世の中に男が嫉妬の爲めに女を殺すことは往々聞くが、それは一時の出來心が多いやうです。そこへ行くと此の狂女になつた女の心理には確に情に燃えた或る何ものが潜んでゐたと思ひます。

著者附記——これは或る人の話を其儘筆記したものであることを特に断つて置く。

幼き日の憶ひ出

— 或る男の手記 —

III

わが愛する妻よ、此地へ来て自分の健康も次第に快復したやうに思ふ。お前が案じてゐる程自分は悪くないつもりだ。醫者の言ふことなどは自分には信じられない。自分の身體は自分自身が一番よく知つてゐるのだ。悪くなりつゝあるか、快くなりつゝあるか、それは自分で判断して見れば分るのだ。兎に角今のところ自分の病氣も急に變化はないだらうと思ふ。それで自分は此の機會に自分の幼き日のこと——何時かお前に話さうと言つた——を書いて置かうと思ふのだ。併し自分の身體の具合で此仕事が何時中止されるとも限らない。其時は其時だ。自分は書けるところまで書いて見るつもりである。さうして書けただけづゝお前の方へ送らうと思ふ。お前がそれを読んだら、其後で保存して置いても宜いし、何かの機會で世に發表されることがあれば尙更いと思ふ。併し強てそれを望みはしない。自分が死んだ後で、若しお前がまた急に倒れるやうなことがあつて、自分の書いたものが反古まごにならうとも、それは構はない。兎に角自分の心は書きたくて一ぱいだ。

自分の故郷と云ふのは、お前も知つてゐる通り南國の邊鄙な片田舎だ。彼處で自分は六つの歳まで育つたのだ。自分の家は自分がまだ此世に生れない前は、村での素封家で、祖父は一村の父と仰がれ、永く村長を勤めてゐたさうだ。父の代になつた頃から、家運は次第に傾いて自分等の生れ出たのは、益々衰微して行く時分であつた。殊に自分は七人の同胞のうちの末から二番目なので、お前が長女に生れて受けたやうな父母の慈愛は自分には求められなかつた。けれども自分は父母に代る祖母の愛があつた。それが爲に自分はどんなに幸福だつたか。自分に覺えてゐる五つの春まで、晝は祖母に負はれて遊び、夜は祖母の暖い懷ろに抱れていね、食べたいものも好きな玩具も、皆云ふがまゝに祖母が買つて呉れたやうに記憶する。だから幼い自分は姉妹から嫉まれた位であつた。何故多くの姉妹中で自分一人が祖母に愛されたのか自分にも分らない。祖母も恐らく何故多くの孫の中で自分一人が可愛かつたのか、自分に分らなかつたであらうと、自分は憐憫するのだ。併し人間の愛と云ふものの中には、一寸言ひ表し難いあるものが潜んでゐるに違ひない。假へば自分を愛してゐる人に、何故あなたは私を愛するのですと訊いても、其人は其理由を述べることは出来ないだらうと思ふ。殊に人間は自分が愛してゐる人を、他人から罵詈雑言

たり干渉されたりすると、たまらなく癪に障るものである。恰度そのやうに祖母も親戚や、他人の家では勿論、自分の家でも自分のことを批評されたり干渉されたりすると、何時も怒るのが常で、家族のものでさへ可笑しく思つてゐたと云ふ話を聞いてゐる。祖母は自分にこそ何とも言はなかつたが、今でも自分の母なんかには言はせると、却々勝気で意地張りの頑固な女だつたらしいのだ。自分の癪に障つたことがあると、幾日も食事をせず、録に口も訊かぬと言ふことが往々あつたさうだ。さう云ふ時母は姑の機嫌をとる爲めに、どんなに心を痛めたことか知れないと言つてゐる。でも、お前のやうに一度も姑に仕へたことのない者には、此の心持はまだ分るまいと思ふ。だから、自分の母などのやうに、姑や小姑のある中に嫁に行つて苦勞した人に比ぶればお前などはどんなに幸福か知れやしない。併しお前には自分のやうな片意地な變屈な働きのない良人を持つて、却て言ひ知れぬ苦勞があるかも知れない。こゝまで書いてくると、もう何だか頭が疲れて來た。今日はこれで筆を止める。

此前のもつと書き續けるつもりでゐたが、急に熱が出て來たので、妙なところで筆を止めねばならなかつたことを遺憾に思ふ。あれから既に一週間以上になる。今日は書かう、明日は書かう

と思ひながら、どうも身體の具合が思はしくないので、筆をとりかねたのだ。併し昨日あたりから、また元氣づいて來たので今日は此前の續きを書き始める。

祖母はあれほど勝氣な人ではあつたが、どうかすると非常に氣の弱い人で、些細なことにもクヨクヨして心を勞してゐた。この祖母の血を多分に受けてゐる自分は、自分の氣質を他人から、言はれる度毎に祖母のことを思ひ出すのだ。或る晩自分は齒が痛んで眠られないことがあつた。其時祖母は幼い自分を懐きながら『おうおう、さぞ痛からうな、可愛さうにな、お醫者に行かうにも今は夜中だでな、仕方がないで祖母さんがスリ芋をつけてやるから待つてお出で。』斯う言つて臺所の方へ自ら立つて行つて、芋を摺ると、それを紙につけて自分の頬にベタリと貼つて呉れた。さうして『これで少しでも痛みが止つたらな、祖母さんが明朝早く水神さまへ連れて行つて齒の痛まないやうに、お願をかけて上げる。』と祖母は慰めるやうに自分を寝かしつけた。間もなく夜が明けると祖母は自分を背負ふて、家から程遠くない橋の袂にあつた水神さまへ、お願をかけたに連れて行つた。それからの歸り途だつたと記憶する。橋の方からやつてくる荷物を満載した荷馬車が、自分の家の前の急勾配になつた坂にさしかゝつた時祖母は自分を背負ふた儘、其

荷馬車を避けようとする瞬間、坂を下る車輪の勢で突き飛ばされてしまつた。祖母が突き倒されたので、自分も其處から二間ばかり放り投げられた。併し自分は大した負傷もなかつたが其時の祖母は何ヶ所も負傷をした。それから祖母は床についた切り、傷が療えた後も、全く足が立たなくなつた。然も老ひの身は、此負傷が原因となつて諸病を惹起して、遂に其一年後には生命までも奪はれてしまつたのだ。その時自分は姉に連れられて遠方へ行つてゐたが爲に、この痛ましい祖母の死に、不幸にして居合せなかつたのを今でも遺憾に思つてゐる。同時に自分の爲に其の祖母の痛ましい惨めな死を招いたことに對して、自分を責めずには居られない。惹いては彼の荷馬車と車夫をも、心から憎く恨まずには居られない。若しあの時あの荷馬車が通りかゝらなかつたら、あのやうな事もなかつたらうにと其瞬間をも呪はずには居られない。思ふさへ余りに悲しい事實ではないか。けれどもすべては運命だ。さう諦むるより他に仕方のないことなのだ。祖母も亦不時の禍とは言へ、當然負ふべき運命だつたと思つて呉れるだらう。何でもまだ祖母が負傷をして、床についてゐる時分であつた。自分が姉に連れられて郷里を出て、二十里余りも距てたあの町に行つたのは。其時の祖母との別離が自分はどんなに悲しく名残惜しかつたか。祖母も如何

に病床にゐながら、愛する唯一の孫の別れに袂を濡らしたか。それはお前にも想像されるであらう。祖母は臥床のまゝ涙に濡れた眼で孫の顔を潰めながら、自分の小さい手を握つて、今別れば是が一生の別れだと言つて泣いた。自分は子供ながらも、どうして宜いか分らないほど泣いた。其の時から二十余年を経てゐる今でも、それを思ふと其時の光景が朧けながら眼に浮ぶ。さうしてよく覚えてゐない祖母の顔が幻のやうに、眼前に現れさうな気がする。祖母は色の白い割合に顔の輪廓の劃然とした小さい懐しい眼の所有者であつたやうに覚えてゐる。小さい引緊つた口元と格好のいゝ鼻とを持つた其顔には、何處かに上品な氣高さがあつたやうだ。それに自分が尤も好きだつたのは、祖母の愛嬌の時にする微笑であつた。人の宜い祖母は一面には非常に偏屈な人に見えたが、他人に好かれる性質の人であつた。自分は茲に自分が生れ出てから此世で一番自分を愛して呉れたものゝ爲めに、深い感謝をすると共に、祖母の晩年に起つた不幸な生の償ひに、自分の魂のあるだけを投げ出して見たいと思つてゐる。人間は愛に報ゆる爲めには、自分の持つてゐる總ゆるものを捧けても惜しまぬものではなからうか。

なつかしいわが妻よ。お前もせめては今日書いたものを讀んで、お前の胸でこの不幸な祖母を

憐れんで呉れ。

昨日は余り感情にのみ走り過ぎて、あれを書き上げた時は、思はず心の疲れを覺えた。とは言へ書きたくて、自分の身體のことすらも忘れてゐた位だ。今日はもつと大急ぎで書かう。

此世で最も愛を受けた不幸な祖母を失つた自分は、其の後子供心にも滅入るやうな氣持で憂鬱な日を送つた。その頃父は二番目の兄を連れて遠く南國の方へ行つてゐたのだ。

母は暫らく自分の里の母の許へ行つてゐたが、其時分は既う子供達を對手に素人下宿などを始めて父の留守を守つてゐた。自分が六つの春に一番上の姉に連れられて、郷里を出てから一二年の間は、殆んど一家離散の有様であつたのだ。二人の姉と自分とは知らぬ他郷に、母や其他の兄弟達は故郷に、父は旅から旅へ、それを思ふと幼い自分は、子供心に消え入るやうな淋しい悲しさを感じた。其時から既に憂鬱な氣質は自分の心の全體を支配してゐたやうに思ふ。他の子供はやうに快活なところは少しもなかつた。冬の寒い日などは終日火鉢にかちりついてゐるので、姉達から此の子は祖母さん育ちだから、老人見たやうに火鉢から離れないのだらうなどと言はれたものだ。何でも其時分だつたと思ふ。姉が自分に新しい羽織を縫つて着せたところが、其日の中

に火鉢で袖を焼きこがして穴をあけた——姉は今でも冬になると、其時分のことを昔話のやうにすることがある——それほど無精な老人じみた自分でも、流石に其時ばかりは姉達に叱られるのを怖れた。さうして自分の誤ちを悔ゆることに躊躇しなかつた。

それでも小學に這入る頃の自分は、余程世馴れた子供のやうに近所の餓鬼大將の中に交つて川へ行つたり野原へ遊んだりするやうになつた。時には自分が總大將となつて指揮を執るやうな少年であつた。その頃自分の家は二階があつたので、雨の降る日などには近所の子供達を多勢集めて、學校の眞似などをやつたものだ。小學校に通ふやうになつて、貧しい少年の心はまた一轉期を來した。それは境遇の貧しさから、苦勞を知らない少年の心の眼を開かしめたものであらう。修身の時間に二宮尊徳翁の話などを聞くと、何故かそれが身に浸みて感じられた。遂にはそれが動機となつて、家計を助けようと云ふ心が起つて、學校から歸つてから、若しくは朝學校に行くまでの時間を利用して、豆腐を賣りに歩いたものだ。町の人はこの影の薄い豆腐賣の少年の姿を、どういふ眼で見たであらうか。同情は忽ち意外の販賣成績を擧げた。併し弱い少年の腕には、余りに豆腐の器が重すぎる爲に、時には轉覆してすつかり臺なしにすることもあつた。さうして折

角儲けた金もさらけ出すのみでなく、損失を償はねばならなかつた。其内次第に賣行きもよくないで店頭やめてしまつた。其間家計を助けるまでには至らなかつたけれど、少くとも貧しい母の心を慰めたことは、自分が世の中への第一歩として、忘るゝことの出来ない一つであるのだ。妻よ、この世の中への第一歩が、自分の心の上に、如何に生きることの苦しみの味を知らしめたか、略ぼ想像が出来るであらう。おゝこの世の中への第一歩よ。少年の心に得た強い印象よ。

少年の日

— 異國の婦人へ宛てた手紙 —

遠く海を越えた異郷の地で、病を養ひながら傳道に従事せられてゐた貴女が、到頭病の爲めに日本の地を去られると言ふ消息を得た其日から、私は書かうと思ひ立ちながら今日が日まで、書かずゐるた貴女への永い手紙を今日はやつとの思ひで書き初めました。

斯うして鈍り勝ちな筆を執り上げて、あの時代のことを追想して見ると、何もかも夢のやうな氣がします。

南國とは言へ、冬の日の北風の強い日などには底冷えのするやうな寒さに震へながら、日課のやうにした庭掃除や草取りが、どんなに辛く苦しく思はれたこととせう。けれども其日課を済した後の自分は、何故あの位のことを辛いのか、何故あの位のことを苦しいのかと自分で自分の心を責めずには居られないやうな氣分になるのでした。

恰度貴女が嗜れた天氣のいゝ日に、キラ／＼した日光を嫌厭される反對に、雨の降る日を嗜好されたと同様に、其頃の私は私の日課のために何時も雨が降つてくれればいゝと思ふことがありました。何故と言ふに雨が降ると庭の掃除は出来ないし、それかと言つて私の手で出来さうな仕事も他にはこれと言つたものもないやうでしたから。さう言ふ時には定つて料理場の方の手傳を

する位が私の仕事で、其頃貴女の家の料理番兼女中と言つたやうな資格で、住込んでゐたお嘉代さんと云ふ近在から雇はれて来て居た女と一緒に、ホークやナイフなどの磨き方をさせられたものでした。さうしてそれが済むと他の日課の時と同様にお茶が出ました。其お茶の時でも何時もとは賑かで楽しいので、好きなお菓子はなくても、雨の日のお茶の時が、どんなに懐しく思はれたでせう。時には私は暖爐に使用する薪を割ることや、菜園の手入などもしました。それがために其頃の私の手は自分でも吃驚するやうに荒れ太つてゐました。

私は何時も日課の後で、食堂の隅や、貴女の部屋で英語を習ふのを楽しみにしたものでしたがそれも始めのうちだけで、次第に馴れるにつれて何となく厭氣いらいがさして來ました。それは私の肝腎に思ふ譯讀ではなくて、發音を覚えるだけのリーディングに過ぎなかつたからでもありませんが、時とすると客との應接のために日が暮れても教はる時間を得ることが出來ずに、料理場の方で女達と雑談に耽りながら、客の歸るのを待つために空しい時間を費さなければならぬやうなことがありましたので。のみならずそれが爲めに自分の家の方へ歸るのが遅くなるにつれて、明日の學課の豫習に差支へると云ふことが氣にかゝりましたから。それでも私が貴女の馴れない日

本語の勉強を手傳ふやうになつてからは、私の勉強も餘程面白くなつたやうでした。よく貴女が國の言葉を混せて日本語をお話しになる時には、私も得意になつて種々な話をしました。其話の中でも時には私の知らない單語が貴女の會話の中に交つて出ることもあり、私の會話の中に貴女の未だ覚えられない日本語が思はず私の口から出ることもありました。さうすると何時も貴女は自分の書齋から、ローマ字の日本語の字引を取出して來て、私の言つた聞覚えのない言葉を羅馬字で手帳に書きつけて置いてから、其字引を繰つて見ると云ふやうなこともせられたやうでした。殊にさう云ふ時ばかりでなく、他の日本人と話をする場合でも、自分に氣付いた分らない言葉があると、ポケットの中にある手帳を出して、遠慮もなく書付けて置くと云ふ風でしたから、外國人としての貴女の日本語の研究も、著るしい進歩を見ることが出來たやうに思はれます。其證據には一年も経たないうちに、貴女の日本語は何年も前から來て研究してゐる宣教師の人々に比べて、頗る流調に聞えるやうでした。それは決して私ばかりが御世辭で申すのでも御座いませぬ。その頃の貴女のうちに出入してゐた多くの人が、さう云ふことを申してゐるのを耳にしたのですから――。

考へて見ると私も餘程子供らしいところがありました。月々貴女から出して貰つてゐた學資は多額なものではなかつたが、食ふことを省いて只だ學資だけの費用だつたのに、毎月それが不足を告げて文房具屋などに借金を拵へたこともありました。食ふことだけは家の方でしてゐたので、私の母や姉などは私の學資の不足を聞いて寧ろ不思議に思つてゐたやうでした。それも其咎です。田舎の中學の初年級にあつて、どう考へてもそんなに費用がかかる筈はないのですから。實際自分でも自分の使つたことが分らない位に、自由に懐から出して居ました。資に窮する貧乏な身でありながら、物を買ふにも事をするにも、すべてが他の立派な家庭の子弟達と一樣にすると思ふ風で、其頃の私は極めて華かな夢を見てゐたのでした。さう云ふ中でも日課のやうにした掃除だけは、決して故なくして欠がしたやうな日はありませんでした。しかし幼い時から見榮坊の私は、あの貴女の住居の門から玄關迄の道を掃除するのに、どんなに心を苛立せながらしたこととせう。それは外でもない、唯さう云ふ下男のするやうな仕事を、教會の人々や貴女の家へ出入する人々に見られると云ふ羞恥があつたからです。

雨上りの日に尻をからけて、門の附近の草取りなどをしてゐると往來を通る人々が、よく私の

顔を覗いて行きました。私はさう云ふ時、いつも自分の顔を何處かへ隠したいやうに、人知れず顔を眞赤にするのでした。時には餘り顔を見られるのが厭なので、門の扉を閉して置いて其の間に慌しく大急ぎで掃除を済ませることがありました。それでも其の隣間訪ねて來る人でもあると、私は不意に敵にでも襲はれたやうに、度膽どたんを抜かれる思ひがしました。

私はさう云ふことが度重なる毎に、羞恥の念から自分の境遇をどんなに呪つたこととせう。その爲めに自分の弱い心は幾度か挫くじけました。いつそ學校をやめて了はうかとさへ思つたこともありましたが、或は斯様な厭な仕事を強てせねばならぬ位なら、東京か又は自分の未知の國へ行くて、恥も外見も厭はず苦學しようと思ふ氣にもなりました。多分貴女も御記憶でせう、私が料理番のお嘉代さんと衝突して、暫らく家出して旅に出てゐたのは、あの時のことを思ふと自分でもよくあんな思ひ切つた事が出來たと驚かれる位です。あの時の私は貴女の宅から歸る途すがら、苛立しい悲しい氣分で心の遺瀾なさに身のやりばのないやうに悶もえました。さうして自分の家の園を跨ぐまで、自分の身の處置について様々に考へ迷つた末に、どうしても家を飛出して、自分の行けるところまで行つて見ようと云ふ氣になりました。旅に出たことのない私には、さうして行

つて見たら、自分で何うにかなりさうに思つたのでした。屹度そこには自分を待つてゐるものがあるやうな気がしたのでした。さうしてこそ始めて自分の道が開けさうに見えるのでした。それにして先立つものは旅費でした。私の懐中には其時僅の金が残つてゐる切りでした。それで種々考へた後で、教科書や辭書を古本屋に賣つて、それを旅費にすることにしました。そこで其晩私はそつと風呂敷に本を包んで家族のものに知れないやうに家を出ました。何でもそれは皆で四圓位に買つて呉れたのでした。私はそれを手に握ると急に勇み立つて自分の家へ歸ると、何食はぬ顔して早く寢床に這入りました。さうして夜の明けるのが待遠しいやうに、床のなかで幾度も寢返りを打ちました。やがて三時を打つ時計の音が耳に這入りました。私は家族のものに氣付かれないやうに、そつと起きて見ました。皆んなスヤ／＼とよく寢入つてゐましたので、私は直ぐに用意をすると前の晩に用意して置いた小さい風呂敷包みを小脇に抱へて、靜かに勝手の方へ鍵をはづして開けると、また靜かに音のしないやうに締めて置いて、遁けるやうに停車場の方へ忙ぎました。戸外はまだ仄暗く夜霧に包れて、犬の影さへ見えませんでした。私は後から追手に追はれるやうな不安な氣持で、急げるだけ急ぎました。停車場に行つて見ると、一番發の列車が

出るまでには、まだ一時間餘も待たねばなりません。私はそれを思ふと氣が氣でなく、そこへ凝然としてゐる氣はせず、兎に角歩くだけ歩いて途中から汽車に乗らうと思つて、國道に沿ふて歩いて参りました。それから恰度ある小さい驛についたのは六時頃でした。そこで私が汽車を待合せてゐる間も、不安は絶えず私の心を襲つて來ました。併し私は愈よ汽車に乗込むと何となく心が落ち着いて途方もない空想に駆られたり、行く先でのことを思つたり、自分が家出した跡の家人の驚きを想像したりして、其日は先づ嫁いでゐる私の姉の家まで行かうと決心しました。汽車から下りると、また十時間餘も馬車に揺られて其晩おそく姉の家へ着きました。姉の家では私の姿を見て別に驚いた様子もしてゐませんでした。それも其筈です。聞いて見ると其日自分の家の方から電報が來てゐたのでした。私はまるで猪がわなにかゝつたと同然だつたのです。茲で私の目的はすつかり破壊されてしまひました。私は間もなく義兄や姉から繰り返し諭されて再び自分の家へ歸つて行かねばなりません。私も一時は頑固に自分の意地を張つて聞かなかつたけれど、到頭我を折つて歸つて行つたのでした。あれからと云ふものは、殆んど自分の無謀を悔いて再び貴女の傍で、心を勵しながら勉強したやうでした。併し耐え忍ぶことの弱い私は、其時

から一年も経ぬ間に再び家出をしたのでした。それは貴女がまだ夏の避暑から歸られない時分だつたので、或は御存知ないかも知れません。其二度目の私の出奔は、私としても餘りに軽卒で、深い考もなく旅行をするやうな気分でした。それだけ私の失望も小さかつたやうです。私は斯様にして貴女の許から遁れようとしたことが、唯單に其仕事の嫌厭にあつたばかりだとは何うしても思へません。勝氣な少年の心に宿る止み難い獨立心と、其前から讀んでゐた文學書の影響が多分に私の心を刺激してゐたに違ひなかつたのです。其時分の私は貴女が思つてゐらしたやうな私ではなかつたのでした。貴女の御考では私が將來傳道に従事するものと思つてゐられるやうでしたが、其時分から私の目的は宗教と文學との方向に迷つてゐたのでした。然もそれを意識しながら私の心は或時は宗教の方へ往つたり、或時は文學の方へ迷つたりして、絶えず動搖してゐたのでした。其後ミツシヨンスクールの方へ轉校してからも、矢張り私の心は相變らず何方ともつかぬ中ぶらりんの姿でした。それを思ふと私は今でも貴女を欺いてゐたやうな氣がしてなりません。さうしてあれほど親切に私を助けて下さつた貴女の貴い心に對して、私は知らず、罪を犯してゐたやうな氣がして、強く自分の心を責めずには居られません。何と云ふ意氣地のない恩知

らなだらうか。餘りに思慮のない自分ではなかつたかと思ふと、あの時代の自分が、もどかしくてなりません。何故あの時きつぱり、と心を打明けて、自分の目的に進まなかつたかと後悔されます。貴女にしてもあの時分、私がそれと打明けて男らしい態度を示してゐたら、どんなにか喜んで心持よく御世話をして下さいつたかも知れないと思ひます。けれども私が常にあゝ云ふ心の状態にあつたにも拘らず、心から私の爲めに盡して下さいつた事は、永久に感謝せずには居られません。貴女は私が東京へ來てからも、暫らく私の爲めに學資の補助をして下さいました。私は其時涙なしには其爲替を受取ることの出来なかつた程胸にせまりました。さうして時には文學を捨て、宗教の方へ走らうかとさへ思つたこともありました。けれども文學を味へば味ふ程、それから離れることが出来ないと共に、説教する價值のない自分のやうな人間を思ふと、何うしても宗教に身を投ずることの不可能を知るのでした。私は矢張り自分の本能性を發揮するより他に道はなかつたのです。

私はこの通信に依て、貴女の心に私のあの時代の心が、眞實に通ずることが出来れば此上ない幸福に思ひます。同時に呉々も貴女の健康の恢復を祈ります。

大正十五年九月廿二日印
大正十五年九月廿五日發行

(定價金八拾錢)

著者 松山敏

發行者 東京市外戶塚町上戶塚一〇三二
石躍壽美

印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三
谷口熊之助

發行所

東京市外戶塚町
上戶塚一〇三二

綠蔭社

總發東京六七貳〇八番

目書版出社蔭綠

第二輯	第一輯	綠蔭パンフレット	シエクスピア詩集 (尾關岩二譯)	ハイネ小曲集 (松山敏譯)	松山敏詩集 第一卷	愛慾の悩み (倉田昌三著)	新生の首途 (松山敏著)	生きんが爲に (松山敏著)
人生さまざま	文藝と生活							
送料 貳錢	送料 貳錢	送料 六錢	送料 六錢	送料 六錢	送料 六錢	送料 六錢	送料 六錢	送料 六錢
定價 貳拾錢	定價 貳拾錢	定價 八拾錢	定價 八拾錢	定價 六拾錢	定價 八拾錢	定價 壹圓	定價 壹圓	定價 壹圓

東京座口警振 番六〇貳七六 社 蔭 綠 町塚戸外市京東 二三〇一塚戸上

版五第

◆松山敏著◆ 在田稗装幀

四六判 定價 壹圓 送料 六錢

人生叢書 第一篇 生きんが爲に

本書は著者の全生命の送りで、世の人々と共に眞に生きんが爲に、人生の曠野に旅する人々に送れるものである。即ち收むる處の感想數十篇、加ふるに小品、小説の類約十篇何れもとりんぐの興趣盡きざるもの。必ずや萬人の胸に迫るものがあらう。敢て必讀を望む。

松山氏は詩人であり、小説家であるが、それらのカテゴリーを超えて一つの人間である。吉田絃二郎氏のやうに寂しみを求めもしなければ、武者小路氏のやうに一世を指導する抱負も持っていない。けれども氏は深く凡人である自分を省みる。そこに凡人の喜びと悩みをこら持つてゐる。本書は氏の感想集で生活を受するものはよき共鳴者を見出すであらう。

評聞新知愛新

本書は著者が歩いてゐる藝術への眞ましい詔音である。風の曠野である。そして眞裸になつて見た自己の姿である。心動がされること多い。

東京座口警振 番六〇貳七六

社 蔭 綠

町塚戸外市京東 二三〇一塚戸上

評聞新日毎版大

◆松山敏著◆ 在田稠装幀

四六判 定價壹圓
送料六錢

第三版

人生叢書 第二篇 新生的首途

本書は「生きんが爲に」の著者が、真に生きる悩みと喜びの中に、自我に眼覚むる人々をして、來るべき新生の首途を敘せる長篇で、新生の開拓と共に熱烈なる戀愛問題を描寫する世の若き人々の共鳴すべき著者近來の快作である。新生涯に入らんとする人は讀め。

東京朝日新聞評

内容は『新生の首途』『結婚の日まで』『詩人の夢』三篇の小説で、新生涯に入らんとする若き人に讀ま
るべき書である。

河北新報評

新生の首途、結婚の日まで、詩人の夢の三創作を收む。何れも戀愛を基調としてそれと異なる人生の一面を語つてゐる。

東京市外塚町 一三〇二番

綠蔭社

振替口座東京
六〇七六番

560
2

終